

最優秀賞【中学校の部】

自分を知るための言葉

（課題図書：さみしい夜にはペンを持て）【感想文】

笠間市立笠間中学校 一年 鈴木 健生

話すことが苦しい。話せずにいることも苦しい。言葉が出ない苦しみは、海を潜っていき、息が続かなくなる苦しさに似ている。息ができない、苦しい、それでも、みんなが声をかけてくる。話せないことは、もどかしくて、涙が出てくる。

私は、毎日の生活のほんのささいなことに口出しされると、どうしても声を荒げて返してしまう。ちやうど今からするつもりだった、自分ではこれでいいと思っている。そう言いながら、伝わらないという思いだけが大きくなっていく。私は決して口数が少ない訳ではない。むしろ、言い返したら止まらない。いつまでも止められないことで争いになってしまいうぐらいだ。

「そこは、『はい』でいいでしょ。」

私が、家族から繰り返し言われている言葉だ。どうしてこうなってしまったのだろうか。

どうせ言っても分かってくれないから。話すのもなんだか面倒だから。たくさんの言い訳をして自分

の気持ちをごまかしているが、もやもやした気持ちはいつまでも晴れない。「さみしい夜にはペンを持って」そんなことを言われても何のことかさっぱり分からないが、私が勧められたのは、この本を読むで、自分の考えを書いてみることであった。

まず、昨日の出来事から書いてみた。二十分もかかったあげく、出来上がったのは、つまらない文だった。結局、私は自分の本当の気持ちを「ことば」にできていないのだ。コトバクラゲが運んでくる泡に包まれたように、自分のことが見えなくなっていく。

この本を勧めた父は、私が言葉に詰まってふさぎこんでいると、この本のヤドカリのように話しかけてくる。具体的に、何が不満なのか。誰に対して、何に対して怒っているのか。納得がいかないだろうとしつこく聞いてくる。仕方なく、聞かれるがままに答えていくうちに、少しずつコトバミマンの泡が自分の言葉になっていくような気がする。思っていることの半分も言葉になっていないけれど、伝わっている実感があった。そうか。私は分かってもらいたいのだ。正しいか間違っているか、そんなことが知りたいのではない。私の言いたいことを分かって欲しいのだ。目の前の言葉にならない泡が消えた。

本を読んで考えたことは、小さなメモに書いていった。この本にある通り、短い時間のことを細部に分けて、「あのときの自分」に質問するように、私は自分のことをメモしていった。うまく話せなかったとき、言い過ぎてしまったときに、ヤドカリのような父とやり取りをするように、少しずつ自分と対話

ができてきているような実感がでてきた。短い文ばかりだったが、嘘のない文を書くことができた。

ヤドカりは、自分の書いた文章の読者は、「未来の自分」だと言う。時間が経ってからは、当時のことを振り返り、気が付くことや見えてくるものがあるらしい。しかし、私は何が言いたかったのか、どうして自分が悪いのかを、考えても考えても自分だけでは言葉にすることができない。「あのときの自分」が伝えたかったことは、未だにきちんと理解できていない。「あのときの自分」は苦しみを正確には伝えられず、「未来の自分」である私は理解してやることができないからだ。ただこのまま書き続けていくことで、私はもっと自分のことが分かってやれるような気がしてきた。

今、私は十年日記を目の前にしている。二年前に母が私にくれたもので、一月一日から四日間だけを書いて、ほこりをかぶっていたものだ。とりあえず十日間、本を勧めてきた父を読者にしてみようと思う。

始めに書いたのは「日記を始めることにした」という短い文だ。そして「自分に自分を分かっただけのため」と書き足した。「未来の自分」は、この一日をどのように思い出すだろう。待っていてほしい。